

# 減らせ突然死

# AED推進フォーラム2023

Automated External Defibrillator

「誰もが救命サポーター」という社会の実現に向けて  
— 学校の役割 —



公益財団法人

日本AED財団



# 減らせ突然死

# AED推進フォーラム2023

Automated External Defibrillator

「誰もが救命サポーター」という社会の実現に向けて  
－ 学校の役割 －



## ご挨拶



名誉総裁  
高円宮妃殿下

救命活動の場面で頭が真っ白になるという話をよく聞きます。過去に開催された本フォーラムにおいて、実際にAEDを活用して命を救うことができたという事例を伺っていると、想定外の事態が起きたら頭が真っ白になるであろうことを理解して、あらかじめ準備をしておくことがいかに大事であるかを認識させられます。「目の前で突然倒れる人がいることは決してありえなくはない」、日頃から意識し、考えずとも体が自然に動くぐらいに準備ができているからこそ、いざという時に対処でき、命を救えるという結果に繋がるものと思います。

今回のAED推進フォーラムのテーマは学校です。年齢で命の重みには違いはありませんが、将来の夢や希望、可能性をたくさん持った子ども達が突然死したというニュースを耳にすると心が痛みます。私は日本学生協会基金の名誉総裁も務めています。本基金は高円宮杯全日本中学校英語弁論大会を主催していますが、英語を話せる学生達に、AEDについて話す機会をもってもらおうとの思いから、今回のフォーラムにも参加いただくことにいたしました。この先、こうした学生達が成長し、心肺蘇生の方法やAEDの使い方を広めることで、救える命を救おうという機運がいつそう高まるはずです。

私たち日本AED財団は、救える命を救うことができる社会を目指して、今後とも邁進してまいります。

## 開催にあたって



会長  
岡本 保

本年も、高円宮妃殿下のご臨席のもと、多くの皆様にAED推進フォーラムにご参加いただき誠にありがとうございます。日本AED財団は、突然の心停止に陥った人の命をいかにして救うかということにエネルギーを注いでいます。その時に欠かせないものはAEDですが、実際に心肺蘇生を行う市民の皆様の方が重要です。

多くの人は、咄嗟の場面では頭が真っ白になってしまいます。「助けたい、でもどうしたらよいかわからない、もし間違った行動をとってしまったら」……いろいろな考えを思い巡らせているうちに迷いが生じ、救える命を救うことができなくなった。そうした経験を持つ方もいらっしゃるかもしれません。

本財団は、少しでも多くの方が、咄嗟の場面で躊躇することなく手を差し伸べることができる社会の実現を目指しています。そのためには先ず、学校で救命に関する教育を受けておくことが有効と考えています。あらゆる世代の方が救命について関心を持ち、皆が互いに協力を惜しまない、そうした社会の実現には学校教育から始めるのが最善です。

救命サポーターと呼ばれる協力者を増やす運動も展開しています。本フォーラムでは、「誰もが救命サポーター」をトピックに、学校における心肺蘇生、AEDの使用経験の現状などを、発表、議論いただきます。学校内での突然死をゼロにするにはどういったことが可能で、具体的に何を進めていくのがよいのか？ 子ども達に救命サポーターになってもらうためにはどのような工夫や努力が求められるのか？ 皆様とともに考え、その一歩を進めていく機会となることを期待いたします。

# CONTENTS

## 学校で我が子が心停止！

## 学校での心臓突然死ゼロに向けた思い ..... 6

座	長：三田村 秀雄	日本 AED 財団 理事長
	松岡 康子	減らせ突然死プロジェクト実行委員 NHK 名古屋放送局 記者
	川崎 真弓	
	前重 奈緒	
	上野 愛美・貴寛	

## 学校に求められる2つの役割：

## 校内突然死ゼロと救命サポーターの育成

◆ 危機管理のロールモデル：ASUKAモデルを活かす ..... 15	
	辻野 智香      さいたま市立高砂小学校 養護教諭
◆ DX教材を活用した新しい救命教育 ..... 16	
	千田 いずみ      減らせ突然死プロジェクト実行委員 明治国際医療大学保健医療学部救急救命学科 講師
◆ 世界の取り組み紹介：シンガポールにおける学校教育と DXを組み合わせた取り組み ..... 19	
	岡田 遥平      国立シンガポール大学 Duke-NUS Medical School Health Services and Systems Research Fellow

## パネルディスカッション ..... 21

### 「国民誰もが救命サポーター」を目指して…学校教育への期待

司 会：石見 拓 日本 AED 財団 専務理事  
京都大学大学院医学研究科予防医療学分野 教授  
堀 潤 NPO 法人 8bit News 代表 / ジャーナリスト

パネリスト：芹澤 零音 日本応急手当普及員協議会 代表理事（高校 3 年生）  
辻野 智香 さいたま市立高砂小学校 養護教諭  
湯川 敦代 桃山学院中学校高等学校 養護教諭  
西山 知佳 減らせ突然死プロジェクト実行委員  
京都大学大学院医学研究科クリティカルケア  
看護学分野 准教授

## 2023年度 AED 功労賞受賞者および受賞団体 ..... 29

減らせ突然死「AED 推進フォーラム 2023」は、2023年12月6日(水)に、一橋講堂(東京千代田区)で開催されました。本冊子は、その記録集になります。

3部構成で、第2部の「学校に求められる 2 つの役割:校内突然死ゼロと救命サポーターの育成」の座長は、桐淵博(日本 AED 財団理事/元・さいたま市教育委員会教育長)と西山知佳(減らせ突然死プロジェクト実行委員/京都大学大学院医学研究科クリティカルケア看護学分野准教授)が務めたほか、Liv for School の実演を本間洋輔(千葉市立海浜病院救急科統括部長)が行いました。

なお、財団公式 YouTube に記録動画が公開されておりますので、是非ご視聴ください。

第1部. <https://www.youtube.com/watch?v=2azBCOaU3GE>

第2部. [https://www.youtube.com/watch?v=weliMbIm\\_SY](https://www.youtube.com/watch?v=weliMbIm_SY)

第3部. <https://www.youtube.com/watch?v=aQG7JVCLQJc>

## 学校で我が子が心停止！ 学校での心臓突然死ゼロに向けた想い



座長  
三田村 秀雄



座長  
松岡 康子



川崎 真弓



前重 奈緒



上野 愛美



上野 貴寛

**三田村** これまで日本AED財団は、「心臓突然死をいかに防止するか」を目標に掲げて活動してまいりました。本フォーラムでは、「学校における突然死」をテーマに、学校において心臓突然死がどのように起きていたか、突然倒れた時にどのように対処されていたのかを改めて振り返り、AEDの普及と使用がいかに重要であるかを再認識する機会にしたいと思います。

2004年から一般市民もAEDを使用できるようになりました。近年では学校における心臓突然死はゼロに近づいていますが、2004年より以前に、幾多の不幸な出来事が起き、それが心臓突然死防止の礎になっています。不幸にもご家族を心臓突然死で亡くされた方、AEDによって蘇生したご本人から直接話をお伺いします。

**松岡** NHK名古屋放送局で記者をしている松岡です。まず、川崎真弓さんにお話を伺います。川崎さんは、2002年に当時16歳だった娘の沙織さんを心臓突然死で亡くされました。2002年は一般市民によるAEDの使用が認められる2年前になりますが、当時どのような状況でしたか？

**川崎** 心臓突然死を起こした日の朝、娘は高校入学後、初めての体育祭に参加するために元気に出かけていきました。朝はしっかりご飯を食べ、夜は誕生会をしようね、という話をしたことを覚えています。その日、9月6日は、娘が16歳になるはずの誕生日でした。

**松岡** 朝の健康状態や、様子が変わったことはありましたか？





**川崎** いつもと変わらない朝でした。なかなか起きないところをなんとか起こし、朝食後、いつものように自転車で学校に向かうのを見届けました。

職場で通常業務をこなしていたところ、学校から娘が倒れて病院に運ばれたとの連絡があったため、私は病院に急行しました。娘がリレーに出場して次の走者にバトンを渡した後、突然倒れたということを担任の先生から聞いたのも病院でした。

**松岡** 倒れた後、学校はどのような対応をとったのでしょうか？

**川崎** 養護の先生からその時の状況を伺いました。娘が倒れた後、近くにいた先生が駆け寄り、娘の様子を見て養護の先生を走って呼びに行ったそうです。

養護の先生が娘を見て、これは大変だと皆で担架に乗せてグラウンドから離れたところに連れて行き、そこで初めて救急車を要請したそうです。

**松岡** 今では現場から離れたり、担架をすぐに使ったりすることは勧められませんが、その時はかなり時間が経ってからの救急車の要請だっ

たのですね。当時はまだ一般市民によるAEDの使用は認められていませんでした。AEDについて川崎さんが知ったのはいつですか？

**川崎** 娘が息を引き取ったのは2002年9月10日でした。2ヵ月後、高円宮殿下がスカッシュで倒れられたことをテレビニュースで聞きました。心室細動という言葉を目にし、娘と同じだったのかと思いました。AEDについて調べたのはそれからで、AEDという器械を使用していれば助かる可能性があったことを知りました。

**松岡** ありがとうございます。前重さんにお伺いします。前重さんは、一般市民によるAEDの使用が認められる2ヵ月前の2004年5月に、長男の響さんを亡くされています。当時の状況を教えていただけますか？

**前重** 中間テストが終わった2日後の出来事です。朝からスポーツテストが行われており、午後一番で始まった1,500m走のゴール手前で倒れたと聞いています。

**松岡** その時の学校の対応はどのようなものでしょうか？



**前重** そばにいらした体育の先生と、駆けつけた養護の先生が心臓マッサージを行ってくださったと聞きました。

**松岡** 心臓マッサージが行われたとのことですが、その後の響さんの経過はどうだったのでしょうか？

**前重** 職場で連絡を受けて病院に駆けつけました。救急救命室の前でうなだれている先生と同級生を見て、良くない状況であることを悟りました。何とか意識を取り戻すように祈りましたが、その日のうちに息を引き取りました。

**松岡** もともと心臓に異常はありましたか？

**前重** 異常を指摘されたことはありません。それまでは元気に生活しており、陸上部で中距離ランナーをしていたほどです。17歳の反抗期真っ盛りの男の子でしたから、ニコニコ笑ってではなく、ぶっきらぼうに「行ってきます」と家を出て行ったのが最後になりました。

**松岡** 元気で出かけたはずの我が子が、学校で倒れ帰らぬ人になる、ということを想像したことはありましたか？

**前重** まったく想像をしていませんでした。自分たちに何が起きたのか……しばらくは理解できない状態でした。

**松岡** AEDについて知ったのはいつでしたか？

**前重** 息子を亡くしてから35日くらい経った時、AEDという心臓突然死を防ぐ器械があり、一般市民による使用が認められるようになったことを知りました。あの時、AEDが使えれば息子は助かったのではないかと思い、インターネットで色々検索して調べました。

調べているうちに、AEDについて深く知りたいという強い気持ちが沸き、さらにはAEDを使った救命を習いたいと感じるようになりました。病院、消防署、NPO団体が行っていた救命講習に何度も足を運び、知識を得るとともに使用方法も学びました。米国のカジノで倒れた方のショッキングな映像を見たのもその時です。

ある時、和泉市（大阪府）で校医をお務



めの先生方が、市内の全中学校にAEDを寄贈したという記事を目にしました。循環器内科の医師に「学校にAEDがあり、もし使っていたら」と問いかけたところ、「AEDを使っていたら助かったかもしれない」というお話しでした。それを聞き、AEDの必要性、心肺蘇生の大切さ、そもそも命の大切さを子ども達に伝えていくことが息子を心臓突然死で亡くした私の使命と感じ、まず初めに息子の友人達にAEDの必要性を伝える手紙を書きました。それが私のAED普及活動の一步となりました。

**松岡** 響さんは桃山学院高等学校に通っていたということですが、その後の学校の対応はどのようでしたか？

**前重** 学校の対応は大変真摯なものでした。私たちがAEDを知り、学校にAEDの寄付を申し出た時には、すでに購入を決定していました。息子が亡くなった年の10月に1台目、次の年の5月に2台目が設置されました。グラウンドに近い養護の先生の部屋と、体育の先生の部屋に近いところに設置され、実際に使用できる体制がとられていました。

**松岡** 私は桃山学院高等学校取材しましたが、6～8台のAEDが設置されていました。

**前重** 桃山学院高等学校は今2,000人規模の学校になっているため、計11台が設置されています。

**松岡** どこで倒れても3分以内にAEDが届けられるように設置されています。文化祭では、AED購入のための募金活動も行われたと伺いました。

**前重** 私たちが子ども達に「AEDを知ってください」という手紙を出したら、それを読んだ同級生達は自主的に「AEDを知ってください」という大きな看板を作り、募金活動を行いました。集まったお金は後輩のために使って欲しいと学校に寄付したそうです。その寄付金も含めて、学校はCPR（心肺蘇生）練習用のマネキンとAEDのデモ機を購入し、生徒全員と教職員に講習するためのプログラムを立ち上げ、今も継続して講習会が行われています。

**松岡** 継続して行われているのは大変意味深いことと思います。

上野貴寛さんは投手として甲子園を目指していた高校2年生の時、試合中に胸に打球を受けて、心停止になりました。当時の状況をどこまで覚えていらっしゃいますか？

**上野貴寛** 2007年の春季大阪大会での出来事です。私は飛翔館高等学校で投手を務めていました。3回表、4番打者の打ったボールが私の胸を目がけて飛んできましたが、投手経験の浅かった私は捕ることも避けることもできず、胸に打球を直撃させてしまいました。その後、転がったボールを追いかけて2〜3歩足を進めたあたりから記憶はありません。

**松岡** お母さまの愛美さんにお伺いします。ご主人と一緒に観戦されていたということでしたが、貴寛さんの胸に打球が直撃し、倒れる瞬間をご覧になったのでしょうか？

**上野愛美** いつものように息子が出場している野球の試合を応援に行っていました。息子はピッチャーライナーを捕り損ねて、ドスンという音とともにフラフラと倒れ込みました。スポーツをしている以上、ボールが当たったり、ケガをしたりすることは常ですから、それほど大変なこととは認識せずに痛かったかな？と見つめていました。

**松岡** なかなか立ち上がらない貴寛さんを見てどのように感じましたか？

**上野愛美** 審判や監督が息子の様子を見にいきました。そして、「親御さんいらっしゃいますか？」と呼びかけられ、初めて大事が起きていることを認識しました。救急車を呼び、

到着するまでの間、監督が心臓マッサージをしてくださいました。

**松岡** その時の緊迫した様子が当時の音声に残されています。その緊迫した様子をお聞きください。

## AEDの音声再生

**松岡** 「上野、上野、貴、貴」と監督や仲間が呼びかける声が聞こえます。「生きています」という救命士さんの声も入っており、大変緊迫した状況だったことがわかります。AEDが使用されているのを見て、助かったと思われましたか？

**上野愛美** その時点ではAEDについてよく知らなかったため、何をしているのか、何が起きているのかわからず、ただ呆然としていただけでした。

**松岡** 貴寛さんは、音声を聞いてどのように感じましたか？

**上野貴寛** 翌日にはニュース等で流されたため、状況は理解していました。様々な奇跡が重なって助かったのだ、ということも。

**三田村** どの時点で気付きましたか？意識が戻ったのはいつ頃でしたか？

**上野貴寛** AEDによって電気ショックが与えられた際に呼吸は戻ったようですが、意識を取り戻したのは救急車の中です。吐血して苦しくて、というあたりからです。

AEDの音声については退院してから家で聞きました。それまでAEDは病院預かりとなっていたため、聞くことはできなかった



のです。初めて音声を聞いた時、現場は想像をはるかに超える壮絶なものであったことがわかり、言葉では言い表せない感情になりました。「上野、上野、貴、貴」と呼びかけられているのを聞くと、今でも涙が出てくるような……当時は実際に泣いてしまいました。最初の頃はとても聞いていただけませんでした。

**松岡** 監督や仲間の「助かって欲しい」という強い思いが伝わってきます。後遺症などはありませんか？

**上野貴寛** 病院の先生からはまったく問題ないと仰っていただきました。

**三田村** 上野君の場合、打球が胸に当たったことにより、心室細動という危険な不整脈が出現しました。これは心臓震盪と呼ばれます。

打者の方は自分が打った球で上野君が倒れたのを見て、その後、どんな様子であったのか知っていますか？

**上野貴寛** 入院中に、打者、キャプテン、そして先方の監督がお見舞いに来てくれました。「すみませんでした」と謝罪いただきましたが、

悪意があつてのことではないですし、謝罪はやめて欲しいと伝えました。監督が、「上野君が亡くならなかったことによってこの子ども助かった……野球を続けていける」と仰っていたのが強く記憶に残っています。

**三田村** AEDはその人の命を救うだけではありません。このケースでは、打者の人生も救ったことになります。万が一、上野君が亡くなっていたら、トラウマとして残り、人生に影響を及ぼすことも考えられます。それを避けることができたという意味で、AEDは2人を救ったといっても過言ではないでしょう。

**松岡** 本人だけじゃない。家族も救われる。相手も救われる。これがAEDだ、とその力を感じます。

上野君に使用されたAEDは、実は飛翔館高等学校の卒業生による記念品です。前重響さんが亡くなった後、桃山学院高等学校の養護の先生が飛翔館高等学校の先生にAEDの重要性を伝えたところ、卒業記念品としてAEDが寄贈され、校舎の玄関に設置されていました。そのAED設置のきっかけとなった桃山学院高等学校の養護教諭の湯川敦代先生が会場にいらしています。



川崎 沙織さん

**湯川** 桃山学院中学高等学校で養護教諭を務めている湯川です。響さんの出来事があったから、二度とこのような事故があってはならない、という強い思いを持ちながらAEDの重要性を説く、さらには普及に向けた活動を行っています。AEDを設置することは勿論ですが、使えなければ意味がありません。先生方への講習、生徒への講習、そして命の教育を続けています。

**松岡** 湯川先生の活動がきっかけとなり、上野君が救われたという話を聞いたとき、どのような気持ちになりましたか？

**湯川** 喜びがこみ上げてきました。響さんの事故が起きたのは2004年5月のことです。その年に一般市民によるAEDの使用が認められるようになったのを受け、養護教諭の仲間内でAEDの勉強会を行おうという話が持ち上がり、そこに飛翔館高等学校の先生がいらっしゃいました。

**松岡** 先生方の繋がりでもAEDの重要性が伝わったのですね。前重さんは上野さんがこういった形で救われた話を聞いて、どのような気持ちになりましたか？

**前重** ただただ嬉しかったという以外にはほかなりません。三田村先生がおっしゃるように、



前重 響さん

上野君のみならず、ピッチャーライナーを打った対戦校の生徒さんをも救ったのだと切に感じます。すぐに新聞報道になり、湯川先生からお電話をいただきました。飛翔館高等学校にAEDが設置された経緯を伺い、それが実際に使われたことも聞きました。

その日の夜、湯川先生は息子に報告にきてくださいました。ただただ嬉しかった。それがすべてです。

**上野貴寛** 前重さんのご家族や、その他多くの方々のお陰で助けられた命です。AEDがなかったために亡くなられた方の分も一生懸命に生きようと思います。こうした活動に参加してAEDの普及に努めるのも自分の使命だと思いますし、そうした活動が実になり、助かる命が助かれば、と改めて強く感じます。

**松岡** この20年の間に、AEDを設置する学校が増えました。学校での心臓突然死がゼロに近づく環境が整ってきているといえます。川崎さんは、12年ほど前から小学校でAEDの使用方法や心肺蘇生法の講義を行っているとのこと。その活動による可能性や課題についてどのように感じていますか？

**川崎** 命をつなぐ心を育てる会として活動



している「命のバトン」では、中学校や高校で行う救命講習会の導入の部分で小学校で教えています。その活動から子ども達の可能性を感じた出来事をご紹介します。

地元で開催されたトライアスロン大会での話です。AEDの普及活動を目的に「AEDブース」を設置しました。そこに走り終えたばかりの子どもが手を振りながら入ってきて、「僕はAEDの使い方を知ってるよ」と言うので、「そうなんだね。覚えていてくれてありがとうね」と返したら、隣にいた男の子が「え、俺知らない」と。「じゃあ、知っている君が、教えてあげようよ」とお願いしました。すると、AEDの使い方から胸骨圧迫の方法まで、見事に教えるのです。ブースにいた私たち大人は驚きました。春に授業を行い、その秋のことでしたが、こんなに記憶に残っていたのかと。

続いて、ある中学校での話になります。私たちが行っている「命のバトン」の講習会開催の依頼があり、春に行いました。その翌年、「高等学校で消防のAED講習会を行うため、事前授業として話をしたい」という依頼がありました。新入生600人の前で寸劇をしました。体育の先生と保健の先生でキャッチボールをし、子どもの投げたボールを胸で受けた後、突然倒れるという内容です。保健委員の生徒に、「大変だ。先生が倒れた。助けないと!」と呼びかけたら、子ども達は棒立ちになってしまいました。「早くしないと助からないよ。どうしたらよい?」。そして600名の子ども達に向かって、「この中で、先生を救える人いますか」と呼びかけたところ、1年前に中学校で「命のバトン」の講習を受けたという2人の男の子が手をあげました。そして、もの見事にAEDで救命処置を行ったのです。

子ども達はたった一度。しかも90分程度

の講習を受けただけです。大人が講習を受けてもこのようにはいきません。子ども達の可能性を強く感じる出来事でした。

**松岡** 子ども達にAEDの重要性を伝えることの絶大な効果を感じます。

3か月前に、上野貴寛さんにお子さんが生まれたそうです。新たな命を授かり、改めて感じる事があれば教えてください。

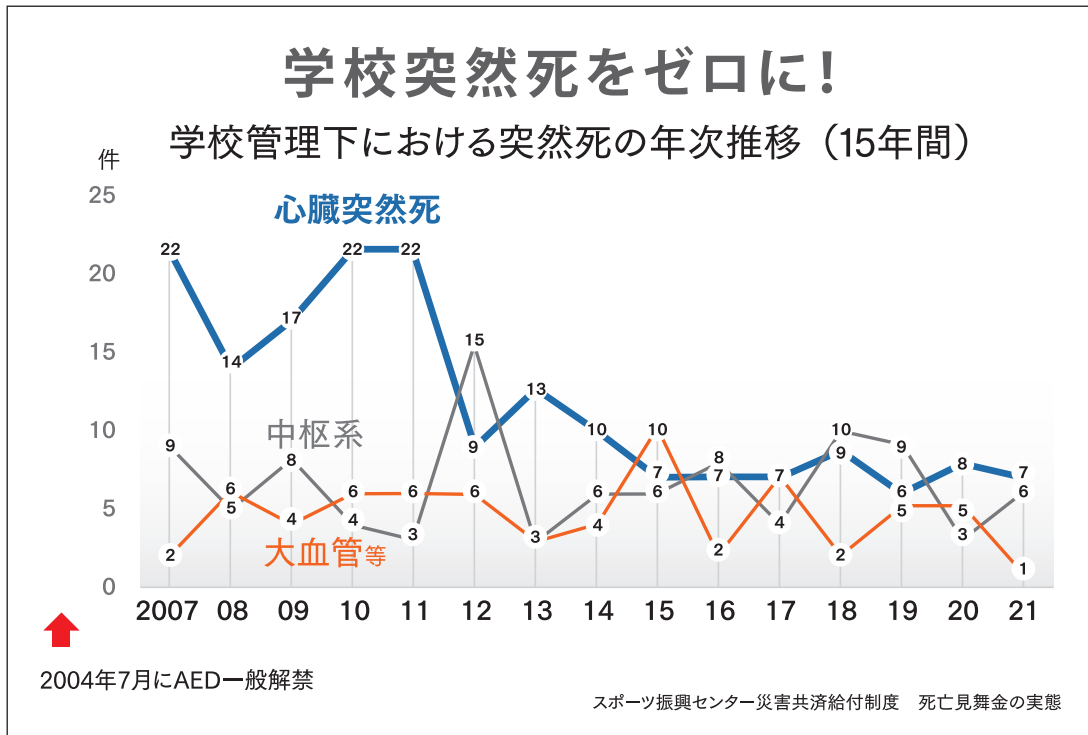
**上野貴寛** 9月6日に娘が生まれ、出産にも立ち会いました。改めて命の尊さを実感する瞬間でした。人生には様々なターニングポイントがありますが、その度に16歳の時の事故を思い出し、AEDで助かったことに対する感謝がこみ上げてきます。今後の人生において、AEDの普及活動に携わっていくことは私の使命です。

**松岡** お嬢さんの誕生日は、川崎沙織さんと同じだそうですね。

**上野愛美** 繋いでいただいた命が孫に繋がっていく……未来のある子ども達にとり、AEDが当たり前の存在になることを期待します。

**三田村** 先ほどAEDは2人を救ったと言いましたが、3人を救ったこととなります。上野君のお嬢さんも。

現在のようにAEDが普及するまでには、いくつかの犠牲がありました。高円宮殿下のご不幸、川崎沙織さんや前重響さんの悲劇……それらの犠牲を経て心室細動やAEDが注目されるようになりました。不幸に見舞われた方々が救命サポーターとなり、新しい救命サポーターを育てるために努力をされていることに非常に感銘を受けます。



学校管理下における突然死の年次推移（15年間）

**【追加発言：三田村秀雄】**

2004年に一般市民によるAEDの使用が認められるようになりましたが、グラフに示されているように、当時学校で毎年約20件の心臓突然死が起きていました。心停止は年間30件くらいでしょうか。心停止そのものはそれほど変化していませんが、注目すべきは突然死が明らかに減少している点です。

2004年以降、徐々にAEDが普及していきましたが、学校への導入は遅々として進みませんでした。学校が先導してAEDを導入していくのではなく、川崎さんや前重さんの

ように、父兄や生徒達が声を上げることで導入されていったため、時間を要しました。しかしながら、2011年くらいから導入が進むと、急速に突然死が減っていったのがわかります。

2011年は桐田明日香ちゃんが亡くなった年でもあります。AEDが設置されていたにもかかわらず不幸な結果になりました。そのような悲しい出来事を教訓として、AEDの普及活動を続け、発展させてきたことにより、今、学校における心臓突然死はゼロに近づいていますが、まだ工夫や努力が必要です。



## 危機管理のロールモデル： ASUKAモデルを活かす

辻野 智香

さいたま市立高砂小学校 養護教諭



さいたま市教育委員会が平成24（2012）年4月に設置した「体育活動時等における事故対策対応マニュアル（のちのASUKAモデル）」作成プロジェクトチームの一員として、事故分析の段階から桐田寿子（明日香さんのお母様）さんとともに活動しています。

平成23年9月29日、明日香さんが倒れた時に周囲にいた先生方は、「脈がある、呼吸がある」と捉えたために、胸骨圧迫はせず、AEDも使用しませんでした。119番通報の内容は、「意識はないが呼吸はある」でした。救急隊到着時には心肺停止状態にあり、救急隊が心肺蘇生を開始し搬送されますが、翌日大切な命が失われました。

事故から1ヵ月程後、「事故検証委員会」が設置されました。専門家の視点で事故対応を検証し、翌年2月に報告書が提出されました。この時点で事故がなぜ起きたかは解明されましたが、明日香さんの御両親と当時の桐淵博教育長は、対話の中からさらにその先の再発防止に繋がりたいという強い思いを一つにしました。そして平成24年4月に冒頭に申し上げたプロジェクトチームが設置され、教育実践者および保護者の視点から再発防止策を明らかにしたテキスト「ASUKAモデル」が誕生しました。最大の特徴は、「反応」や「普段どおりの呼吸」が「ある」か「ない」かだけでなく、「わからないときは、より重い場面を想定して行動する」としたこと。私たち教職員は、医療従事者ではありませんし、普段元気な子ども達を相手にしているため、緊急時に判断に迷うことがあります。「わからない」という選択肢は大変重要と思います。

さいたま市では、教育委員会と市消防局が協力して、応急手当普及員を各校1名以上在籍させる取り組みを開始しました。現在は、教職員約6,000名のうち約1,100名が資格を有しています。応急手当普及員が教職員研修や子どもへの教育内容を担保し、さらに年度初めには、すべての学校で傷病者発生時対応訓練を実施しています。

令和4年度、ASUKAモデル誕生から10年の節目にフォーラムが開催されました。明日香さんが亡くなった9月30日を「明日（あす）も進むいのちの日」と定め、AEDの設置場所や働きについて繰り返し学ぶ日としました。また、市内企業からの寄付により、令和5年度末までに市内58校全ての中学校の正門の外に24時間使用できるAEDを設置する予定です。

救命教育を受けた子ども達が成長し、救急現場で、共通の知識や技術を持つ複数の人が集まり、協力して救急隊に繋ぐことができるような安心に満ちた社会が実現することを願っています。

## DX教材を活用した新しい救命教育

千田 いずみ

減らせ突然死プロジェクト実行委員  
明治国際医療大学保健医療学部救急救命学科 講師



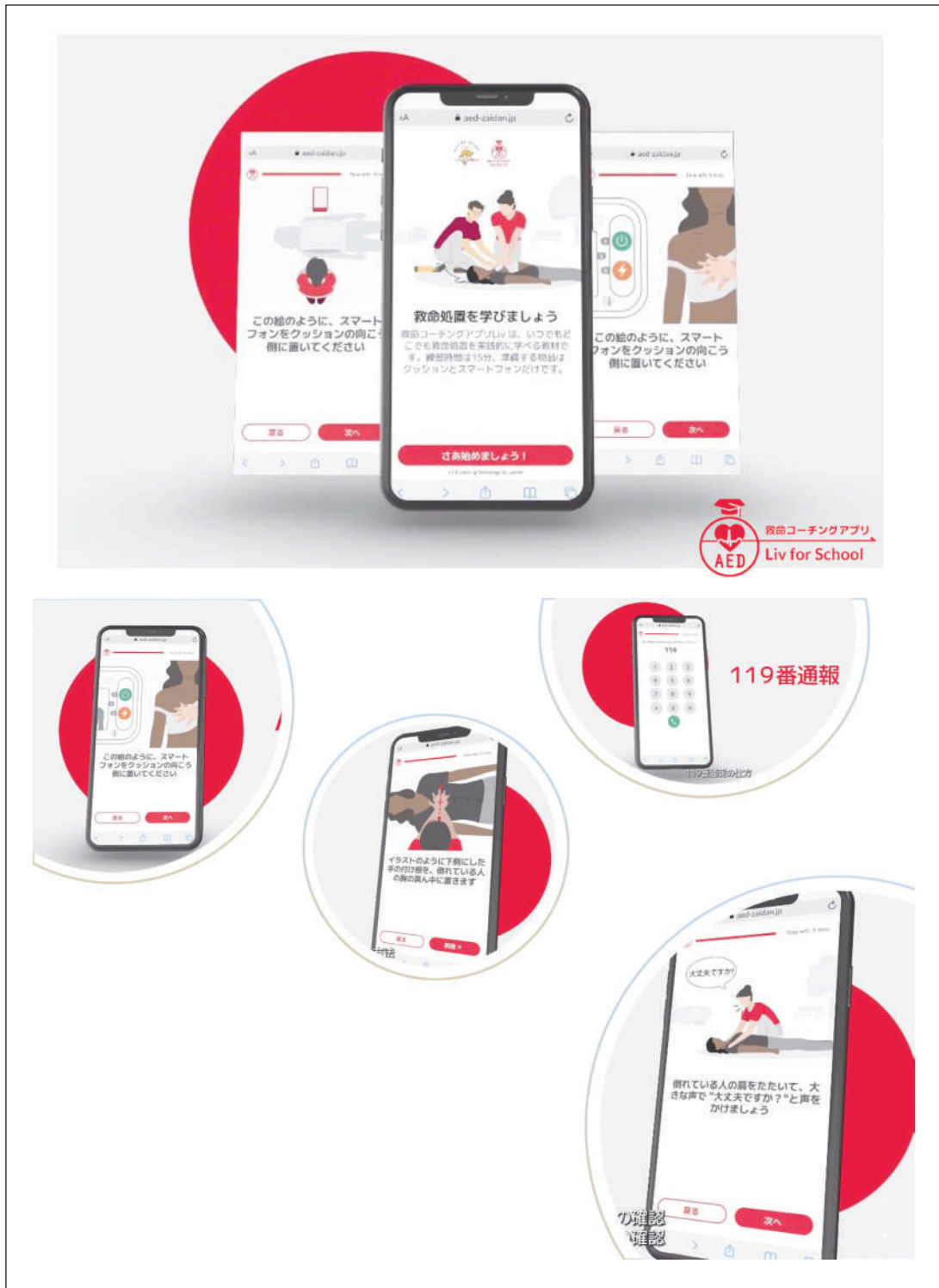
わが国では、消防機関や普及団体、学校等により救命処置の教育・普及がなされてきましたが、いまだ十分とは言えません。特に学校における救命教育（実習を伴う）の実施率は低く、小学校で4.1%、中学校で27.4%、高等学校で27.2%（文部科学省：学校安全の推進に関する取組状況調査。平成30年度実績）にとどまっています。その背景には時間がない、教材がない、指導のためのノウハウがないなど様々な課題があります。

今回、日本AED財団では学校における救命処置の教育のさらなる普及を目的に、『救命コーチングアプリLiv for School（以下、Liv）』を開発しました。Livは、タブレット端末等からQRコードを読み込むだけでクラスルームに入室し、オンラインで学ぶことができる教材です。救命活動の流れに沿って説明と体験を繰り返しますが、以下の①～③の特徴を持っています。

- ① 119番通報：実際に119番通報のボタンを押す練習や、通報後の通信指令員とのやりとりが体験できる。
- ② 胸骨圧迫(心臓マッサージ)：カメラ機能を活用し、モーションキャプチャーで胸骨圧迫のテンポを計測、フィードバックを受けることができる。
- ③ AED：画面に映ったAEDの音声を一人一人が聞きながら、電極パッドを貼ったり電気ショックボタンを押す体験ができる。

このように、Livは体験型のトレーニング教材であり、Livを使うことで主体的な深い学びに繋がるだけでなく、児童生徒の学習状況を把握する機能も備えています。そしてこれまで大きな課題の1つであった特別な教材の準備を必要とせず、タブレットと身近にあるクッションやぬいぐるみだけでトレーニングができます。言わずもがな、これまで使用されていた教材(PUSH&AED体験セットや蘇生人形など)をLivと組み合わせて、より質の高い教育を受けることも可能です。このように、DX教材であるLivは、学校での救命教育において教員の負担の軽減と質の高い教育を両立させた最適なツールと言えます。『救命コーチングアプリLiv for School』は、間もなく2024年度のリリースを予定しています。

※Livとは、ノルウェー語で「生きる・命」を意味しています。



### 救命コーチングアプリ Liv for School

救命活動の流れに沿って何度も説明を聞き、体験を繰り返すことで、適切な119番通報の方法、胸骨圧迫の方法、およびAEDの使い方が習得できる。



救命コーチングアプリ Liv for Schoolの実演の様子

## 世界の取り組み紹介： シンガポールにおける学校教育と DXを組み合わせた取り組み

岡田 遥平

国立シンガポール大学

Duke-NUS Medical School Health Services and Systems Research Fellow



シンガポールは、東南アジアに存在する人口550万人の都市国家で、院外心停止患者の救命のために心肺蘇生、AEDの普及に熱心に取り組んでいます。特に、学校における心肺蘇生の教育推進、地域での一層の普及を目指し、スマートテクノロジーを有効活用しています。

学校における心肺蘇生の教育推進活動としては、小学校5年生と中学校1年生にあたる年次に、体育の授業の一環として全ての学校で1時間の心肺蘇生とAEDの講習が行われるほか、専門学校の入学時などにも心肺蘇生の実習があります。また、学校の先生やスポーツクラブのコーチも2年に1回、心肺蘇生とAEDの講習を受講することが義務付けられています。最近では幼稚園での教育も始まっています。まず、絵本で救急車を呼ぶことや心肺蘇生について学び、その後、少しでも実習します。もちろん5～6歳なので完璧にはできませんが、知ってもらい、楽しんでもらうところからの取り組みです。

地域での普及活動としては、「親子でCPR（心肺蘇生）に挑戦」といったプログラムが図書館やコミュニティセンターなど人が多く集まる場所で、無料で行われています。

また、スポーツクラブや教会など地域住民が集まる場所でも同様のプログラムが開催されています。



「親子でCPR（心肺蘇生）に挑戦」に参加している実際の様子



### myResponderの仕組み

シンガポールの公営住宅には、AEDが2棟につき1台必ず設置され、日常生活の中でAEDが広く認知されています。

スマートテクノロジーの活用としては、“myResponder”というアプリも定着しています。心停止患者が発生すると、その患者の近くにいるあらかじめ登録されたボランティアやタクシードライバー、郵便局員に心停止患者の発生が通知されるというもので、応援要請を受諾すると、患者の位置情報と近くにあるAEDの地図情報が送られます。これを用いることで、迅速にAEDを患者のもとに届けることが可能になります。

こうした取り組みが功を奏して、シンガポールではバイスタンダー CPRの実施やAEDの使用割合がととも増えています。日本での心肺蘇生、AEDの普及の方策を考える上で、こうした海外の取り組みも参考になるのではないかと考えています。

# 「国民誰もが救命サポーター」を目指して… 学校教育への期待



司会  
石見 拓



司会  
堀 潤



パネリスト  
芹澤 零音



パネリスト  
辻野 智香



パネリスト  
湯川 敦代



パネリスト  
西山 知佳

**堀** 『「国民誰もが救命サポーター」を目指して…学校教育への期待』をテーマに、パネルディスカッションを開始いたします。

一部もしくは2部で参加いただいた辻野先生、西山先生、湯川先生に加え、高校3年生で日本応急手当普及員協議会の代表理事を務めている芹澤零音さんをパネリストにお招きしました。

芹澤さんに伺います。今どのような活動をされていらっしゃるのか、ご紹介ください。

**芹澤** 昨年の8月、私が高校2年生の時に日本応急手当普及員協議会という団体を立ち上げました。設立の目的は、心肺蘇生の普及の推進で、特に学校において普及させることを

主な活動としています。

その他、心肺蘇生を広めていくための基盤作りに関する政策提言なども行っています。

**堀** 石見先生、若い力が加わりました。

**石見** 高校3年生が参加すると聞いていましたが、代表理事と記載されていたので、「やはり高校生の参加は難しかったのかな」と思っていたところ、その代表理事が高校3年生と聞いて驚きました。若い力の参加に大いに期待をしています。

**堀** 最近では、リバースメンターという言葉を目にするようになりました。新しい世代の若者



達から我々大人達が学ぶことを意味する言葉で、新しい実装モデルとされています。

さて、これまで多くの知見が蓄積されてきましたが、どのようにしたら、その知見や技術、経験を広め、心肺蘇生やAEDの使用法の習得に繋げていくことができるかを議論いたします。

**石見** 2部で岡田先生からシンガポールの現状をお話いただきましたが、その内容に私は衝撃を受けました。

約10年前は我々が日本のAEDの使用状況を紹介して推進を促していましたが、今や完全に逆転しています。なぜ、このような状況になってしまったのでしょうか？

我々専門家が考えてるだけでは解決に至りません。学校教育において、それらを習得した若い力が柱になっていく必要があると感じています。

**堀** 湯川先生に学校教育について伺います。1部において、現場で取り組んでいらっしゃる活動についてご紹介いただきました。さ

らに普及させるために何が必要か、という点を再度確認させてください。

**湯川** 私どもの学校では先生方はもちろん、体育の授業で子ども達にも救命講習を行っていますが、実際にAEDを使用するには大人も子どもも勇気が必要です。

技術はすぐに取り込めますが、勇気を持たせて実践に繋げることに苦労しています。

**堀** 勇気は技術を超えたところにあると思いますが、どのように教育しているのでしょうか？

**湯川** 技術だけではなく、命の大切さを伝えるために、命にかかわる話を聞きにいかせる、新生児を見に行かせるなどの教育を行っています。それでも、実践に繋げるのは難しく、まだ十分ではありません。

**堀** 「勇気ではなく知識が重要」ということをASUKAモデルでも伝え、キャッチフレーズにもしていますが、辻野先生はどのように思われますか。



**辻野** 小学校5年生、6年生を対象に授業を行っています。小学生は高い壁を持たず、かつ作りません。壁があると、得られる知識も得られなくなりますから、小学生に伝える利点はそこにあるかと思います。講義の導入時に必ず桐田明日香さんの話をしています。そうして子ども達の感情を揺さぶると、壁を持たない小学生はすんなりと吸収できるように思われます。

**石見** 先日も本フォーラムのようなイベントを行いました。その際、「勇気が必要だ。我々大人には勇気がないのではないか」ということが議論になりました。すると、ある塾の先生が「子ども達は大丈夫ですよ」とおっしゃるのです。その方はさらに、「子ども達は少し教えたら、勇気のあるなしにかかわらず、自然と行動に移します」と続けました。

勇気、勇気と言い過ぎる必要はなく、「こういう器械があって、このように使えば心肺蘇生ができる」と教えれば、そのまま素直に理解して行動に移すのだそうです。それが広がっていけばAEDに対する常識が変わっていく。常識が変われば、勇気もそれほど必要ではなくなるのではないのでしょうか。

**芹澤** 人が倒れた時に一歩踏み出せないのは、訓練不足と思っています。自発性を養う教育体制が学校教育の中にあれば、変わっていくのではないのでしょうか。

**石見** お手元の救命サポーターアプリのチラシを見ていただきたいのですが、キャッチコピーを「AEDを動かすのは勇気じゃなくて知識だ」としています。もう一歩踏み込んで「勇気はいらない」としたいのですが、時期尚早という考えもあり、ここ数年議論を重ね

ています。

ただ確実であることは、子どもの時から学ぶことで、それほど勇気を伴わずに行動に移せるようになるということです。

**堀** 仲間が辛い状況にある時、「つらいだろうな。なんとかしてあげられないかな」と相手を思いやる。その思いやりから、勇気が沸いてくるのかもしれませんが。「私が助けなければ、誰が助けるのだ」というような勇ましい気持ちではなく、「何かしてあげたい」という気持ちこそが本質のように思います。そのために必要であるのが、実体験や第三者の経験の共有といえそうです。

医療従事者の方々は、日々、命の重みと対峙しています。勇気の本質とは何でしょうか？

ここを紐解くと、普及にも近づくように思われます。

**西山** 看護師希望の学生の他、京都大学の学生全員に対して心肺蘇生の教育を行っています。

正直に申しますと、白衣を着ている時に心停止に出会うのと、白衣を着ていない時に心停止に出会うのとでは気持ちのあり方が異なります。白衣を着ている時のほうが、決然とした気持ちになっています。

本日ここにおられる医療関係者の方々も「その通り」と心の中で思っているのではないのでしょうか……。

**石見** 新幹線や飛行機に乗っている際に、「お医者さんいらっしゃいませんか？」という現場に何度か遭遇したことがあります。

何が起きているかわからないため、手を挙げるのを一瞬躊躇してしまいます。



**西山** 医療従事者であっても、一瞬躊躇してしまうのが現状です。

一般市民でいる時と、仲間がいて機器も整っている医療施設で職務として対峙する時とは、心の持ちようは異なります。

それでも一歩踏み出さなければいけません。

**堀** 一歩踏み出す、いわば“気持ちのアクセル”を踏み込む時によぎるものは何でしょうか？

**西山** 国家資格を持っている医療従事者である、看護師であるという自身のプライド、そして心肺蘇生の教育を行っている者として躊躇してはいけないという気持ちです。

**堀** 人間社会で生きていくなかで、尊厳をお互いにどのように守りあえるのかということは、大切なポイントです。それを大事に思う気持ちこそが、プライドなのではないかと感じました。

芹澤さんは、講習を受講している同世代ともいえる中学生達に対してどのような思いで接しているのでしょうか？

**芹澤** 町田市と共同で、中学生と高校生を対象に、同年代が講師を務める救命講習を行いました。

先生方や消防関係の大人から一方的に教えられる救命講習は敷居が高いようですが、同年代に教えてもらえるという点で敷居が低くなったようです。この講習に参加した中学生からは「やってよかった。他の参加者にきちんと伝えることができた」という声が寄せられました。この方法は、広めていくべきことのように感じています。

**堀** 京都大学の取り組みも画期的と伺っています。

**西山** 京都大学には、毎年3,000名ほどの新入生がいます。2015年から、新入生が受けるガイダンスで、「胸骨圧迫とAEDの使い方を学ぶ」という講習会を取り入れています。これまでに20,000人強が受講しています。彼らが社会に出る前の最後の教育機関として、こうした取り組みは重要と考えています。

今年4月に受講した学生が、5月に心停止

された方に遭遇したそうです。胸骨圧迫を行った結果、その方は無事に救命され、社会復帰されたという事例がありました。

救命にあたった学生は、「実際の現場は、講習会で学んだことと変わりありませんでした。習った通りのことを行ったまでです。胸骨圧迫を行う際にはしっかりと押さないといけないという知識があり、実施しただけです。ただ、僕たちが行動を起こさなければ命が失われていたところと聞き、よかったと心の底から思いました」と自らの体験について話しています。詳しくは、京都大学のWEBサイト「ザッツ・京大」に、2023年12月27日の記事として掲載されます。

**堀** 20,000人を超える学生が胸骨圧迫とAEDの使い方を学び、それを実践できる状態になっているということに驚きました。なぜ、これだけ多くの学生に学ぶ機会を提供できたのでしょうか？

**西山** 京都大学全体の取り組みとして、新入生全員が参加するガイダンスの中に講習会を組み込んだことです。石見先生はじめ、学内の教員と協同して取り組みました。

**石見** 胸骨圧迫とAEDの使い方の習得を当たり前にする、という取り組みです。

日本AED財団が目指しているのは、小学校からスタートして中学校、高等学校、さらには大学も加えて習得を確実なものにしていくことです。

若年層は中高年層に比べて、記憶力が高い傾向にあります。若い頃から胸骨圧迫やAEDの使い方を習得し、それが当たり前になった世代が増えれば、次第に知識そのものが社会に定着していくかもしれません。

皆が勉強して誰もが知っている知識になれば、現場で行動を起こすための勇気は少なくてすみますし、当たり前前の行動として誰もが協同して行動を起こせます。

**堀** 湯川先生の「勇気はどうすれば？」の問いに対する回答の一つは得られたのではないのでしょうか？

**湯川** 議論を拝聴していて「思いやりも重要」と感じました。

私の同僚の養護教諭が、生徒に対してAEDを使わないといけない場面に遭遇したそうです。私どもの学校では先生方に対して救命講習を行っていますが、いざとなると行動に移せず、救命処置を行ったのはその養護教諭だったそうです。その時の思いを尋ねたところ、「私がこの子を助けないといけない状況だ。この子を待っている家族がいる。何とかしないとけない」という思いやりに満ちた感情が沸いたと話していました。

知識、勇気、そして思いやりを持つことが、人を動かす重要な要素であると感じました。

**辻野** 私が授業を行う際には、重要性を認識し自信を持つことができるような授業構成にしています。重要性を理解し、知識を得て実習の経験を積み重ね、自信を持つことができれば、一步踏み出すことができるように思います。

**堀** 学校の業務は多岐に渡り、かつ多忙です。こうした知識の確保や思いやりについて改めて考える時間を確保することの難しさを取材していて感じます。



**石見** 厳しい言い方にはなりますが、学校の先生方がきちんと救命処置ができるようになるのは、子ども達を預かっている立場として、義務ともいえるのではないのでしょうか。勇気のあるなしではありません。

やるべきは、AED普及活動のスタンダードを変えることです。一般市民のAED使用が認められていなかったときは、AEDが使えず命が失われても、責められることはありませんでした。今後、AEDがさらに普及して教育体制が整った場合、AEDを使わなかったために命が失われるようなことがあれば、その責任を問われるようになるはずです。AEDの普及が広まるとともに、責任のレベルも変わっていきます。そういう意識、覚悟を持たないといけません。

学校のスタンダードも変わっていきます。先生方は勇気があるとなかろうと訓練を受け、実行できるようにならないといけません。

とにかく、まず知識を得てください。ASUKAモデルの「判断ができなかったり、迷ったりしたら、胸骨圧迫とAEDの使用に進む」という知識、高円宮妃殿下がおっ

しゃっているように「呼ぼう、呼ぼう、まず呼ぼう。呼んだらAEDは教えてくれるよ」という知識、放っておいたら必ず亡くなってしまおうという知識。そうした知識を得て、それを広げることが重要です。

**湯川** 訓練だけではなく、学校安全を学校経営の基本に置くことも重要です。

暑い時期に運動会を行う。前重響さんを例にあげると、寝不足の恐れなどがある中間テストの後にスポーツテストを行う。そういったことは適切ではありません。管理職の先生方には、「何が一番大事なのか、命が大事だ」ということを、まず念頭に置いていただきたい。

やるべきことは多く、進学実績もあげないといけない。先生方のご苦労は重々承知したうえでお願いします。

**堀** 言いたいけれど、立場上なかなか言えない。「学校経営も理解しているつもりです。しかし、学校安全を最優先でお願いします」。現場の先生方から校長先生への切なるお願いです。

**西山** 看護の領域では、DX(デジタルトランスフォーメーション;デジタル技術を活用し、人々の生活をより良い状態へ変えていくこと)を用いた教材を使うことで、教員側の負荷をミニマムにして、教育の効率をあげるようになってきています。

**堀** DXを駆使することで、先生方の負担軽減にとどまらず、様々な手法でエンターテインメント性をも加えることができるため、有効な方法といえそうです。

いかに効率をあげていくことができるか? 効率を上げながらも思いやりのある温かい教育を施していくか……。様々な工夫が必要です。芹澤さんはどのようにお考えでしょうか?

**芹澤** 教える側の知識不足、そもそも教える人自体が不足している、ということもあると考えています。その不足を補えるのがデジタルです。デジタルを駆使することで、解決できることは多いと思っています。

**堀** 日本AED財団ではデジタルを使用した普及にも力をいれ、アプリの開発なども行ってきました。「何」をデジタルに置き換えるのが成功への近道であるのか。

PHR(パーソナル・ヘルス・レコード;個人の健康・医療・介護に関する情報を活用するためのシステム)分野の専門家である石見先生はどのように考えていらっしゃいますか?

**石見** AEDに関する教育に限れば、我々日本AED財団も責任をもたないといけません。質を担保し、なおかつ現場の先生の負担を軽減させる方法を考え、実践していかななくてはなりません。

学校教育に根付かせるためには、外部に頼ることなく、学校の先生が生徒たちに教えられるようになるのがベストです。先生方が多忙を極める中、そうした環境にするためにはデジタルを活用することが近道です。

**堀** 芹澤さんに伺います。普及活動をされている際、どのようなことが課題と感じていますか?

**芹澤** 先生方が受講する救命講習は、業務内で行われていることが多いため、講習時間を短くしたりするなどの特例措置があるという話も聞きます。その良し悪しは別として、胸骨圧迫の正しい方法を取得し、それを子ども達にどのように教えるのが最善であるのか等について、ディスカッションしたり、学んだりする時間が必要です。その時間がないことが問題ではないかと感じています。

また、救命講習について、海外ではボランティアではなく、いわゆる「職」として形態化されている国もあります。教える側にも責任が問われることを考えると、何かしらのインセンティブがあってもよいように思われます。

**堀** 職種に伴うプライドに支えられるのみならず、より緊張感のある普及活動とするためにインセンティブが発生することについてはどのように思われますか?

**西山** 国家資格を持つ医療従事者としては、絶対に普及活動を行わないといけません。

そもそも、なぜ医療従事者になったのか。

原点回帰ではありませんが、そうした気持ちを常に意識しながら、普及活動に取り組んでいく。それが最も重要で、その上でインセンティブもあれば、さらにモチベーションも上がるはずです。

**堀** インセンティブについては、難しい問題です。

**湯川** 気持ちを伝えていくしかないと思っています。本日のフォーラムも、全国の先生方に聞いていただけたら、理解や思いが深まるはずです。

**堀** 本日のフォーラムでは大変大事なメッセージをいただきました。着地点たる理想も、やるべきこともわかっている。わかっていることを理解したうえで、どのように改善していけばよいのか？

**辻野** 幸いなことに、さいたま市民は協力的であるため、心肺蘇生やAEDの使い方の習得について、他の地域より進んでいるように思われます。今後も持続していくことが課題です。

**芹澤** 研究者と学校教育者が協力していけば、さらに実行に移せると感じています。もっと横のつながりをもつことが大切です。

**石見** シンガポールでは市民による心肺蘇生率は70%になっているそうです。デンマークは80%と、さらに高率です。

我々が、今、やるべきことはわかっています。学校教育では、小学校から、あるいは幼稚園から大学にいたるまで、先生方をサポートしていく。救命サポーターアプリをはじめ、

デジタルを駆使し、すぐに現場に駆けつけることのできる仕組みを構築する。それを活用すれば、「みんなが救命サポーター」は可能になります。遠い未来の話ではありません。

本日、この場に集まって情報を共有した皆様にお願ひです。思いを一人一人に伝える力をお貸しください。

**堀** 是非力をお貸しください。本日は誠にありがとうございました。



## 2023年度 AED 功労賞受賞者および受賞団体

### ★ 最優秀賞 ★

### スポーツ中の突然死から命を守る 国土館大学モバイルAED隊

受賞団体：国土館大学 防災・救急救助総合研究所

東京マラソンをはじめとするマラソン大会を中心に、年間70大会を超えるスポーツイベントで「モバイルAED隊」を活用した救護活動を実施。心停止で倒れてから3分以内のAED使用を目標とし、コース上でAEDや応急処置のための資器材を持ち巡回するチームが緊急時にいち早く駆けつけ処置を行う。近年ではシステムのDX化を図り、リアルタイムでの映像通信等の体制の強化を進めている。

マラソン大会の救護活動では、2004年～2020年に全344大会で42人が心肺停止状態に陥ったが、そのうち39人のランナーを救命した。



受賞者には賞状と副賞として以下が授与された。( )内は提供企業・団体。

- 【最優秀賞】**
- ・ミラーレスカメラ EOS R100(キヤノン株式会社)
  - ・浮くリュック ビートボード(株式会社三和製作所)
  - ・川崎ブレイブサンダース ペアチケット(株式会社ディー・エヌ・エー)
  - ・サランラップバラエティーギフト(旭化成ゾールメディカル株式会社)

- 【優 秀 賞】**
- ・ミニフォトプリンター(キヤノンマーケティングジャパン株式会社)
  - ・一体型上腕血圧計(オムロン ヘルスケア株式会社)
  - ・防災備蓄セット(株式会社三和製作所)
  - ・VRゴーグル(日本光電工業株式会社)





## ★ 優 秀 賞 ★

### 薬学生および薬剤師・学校薬剤師に対する 一次救命処置の普及活動

受賞者：大阪大谷大学 薬学部 小畑友紀雄

2011年から薬学生を中心に一次救命処置教育を行っており、2023年10月までに計856名が受講。受講した学生の中から指導者資格の取得者も生まれている。薬剤師、登録販売者等に対しても講習会を実施しており、学校現場での指導者確保にも貢献している。受講した学校薬剤師2名が認定インストラクター資格を取得し、担当校で活躍している。また、薬学教育者へ向けたシンポジウムや講習会前後の意識調査、啓発記事を学術雑誌などに投稿している。



## ★ 優 秀 賞 ★

### 身近で知ってる場所にある、24時間使えるAED

受賞団体：株式会社小山本家酒造

AED58台とAED屋外収納ボックス58台をさいたま市に寄贈。  
寄贈されたAEDはさいたま市内の全58校の公立中学校の正門前に設置され、生徒はもちろん、地域住民が「見慣れた場所」に、24時間いつでも、いち早く取りに行ける環境になっている。





## 後援団体

厚生労働省	文部科学省
総務省消防庁	東京都教育委員会
全国学校安全教育研究会	全国養護教諭連絡協議会
日本赤十字社	公益社団法人日本医師会
公益財団法人日本スポーツ協会	公益財団法人日本学校保健会
公益財団法人日本心臓財団	一般社団法人日本救急医学会
一般社団法人日本循環器学会	一般社団法人日本循環器協会
一般社団法人日本蘇生協議会	一般社団法人日本不整脈心電学会
一般財団法人日本救急医療財団	日本放送協会 (NHK)
朝日新聞社	読売新聞社

## 協賛企業 (50音順)

旭化成ゾールメディカル株式会社	オムロンヘルスケア株式会社
キヤノン株式会社	キヤノンマーケティングジャパン株式会社
株式会社三和製作所	株式会社 CU (CU Corporation)
株式会社ディー・エヌ・エー	日本光電工業株式会社
日本ストライカー株式会社	日本ライフライン株式会社
株式会社フィリップス・ジャパン	森ビル株式会社
レールダルメディカルジャパン株式会社	

# 減らせ突然死 AED 推進フォーラム 2023

「誰もが救命サポーター」という社会の実現に向けて - 学校の役割 -

発行 2024年2月

発行所 公益財団法人日本AED財団

〒101-0047 東京都千代田区内神田2丁目7-13 山手ビル3号館1階

TEL 03-3253-2111 FAX 03-3253-2119

URL <https://aed-zaidan.jp/index.html>



DX教材を活用して  
全ての人々がAEDを使える世の中へ

# 救命コーチングアプリ 『Liv(リブ) for All』 2024年1月19日リリース

AEDを用いた救命処置を自己学習できる  
革新的な無料オンライントレーニング！

必要時間はたったの15分

必要な道具はスマートフォンと  
クッションのみ

デジタルテクノロジーを活用し、効率よく緊急時の行動を体験  
119番通報や胸骨圧迫、AEDの利用法などを学べます



↑ 詳細はこちらから



# みんなで作る AED N@VI

AEDの設置に関するルールは存在しません。

様々な団体や個人が任意で設置していますが、

いざという時のために設置情報を共有することが大切です。

AEDを見つけたら登録！ みんなで正確で新しいAEDマップをつくろう！

心臓突然死  
70,000人  
以上

救命率  
1分経過  
約10%減る

心肺蘇生と  
AEDで  
救命率約5倍

スマートフォンを使って最新のAED設置情報を集める  
参加型のプロジェクトです。



↑詳細はこちらから

A

E

D

ど

こ

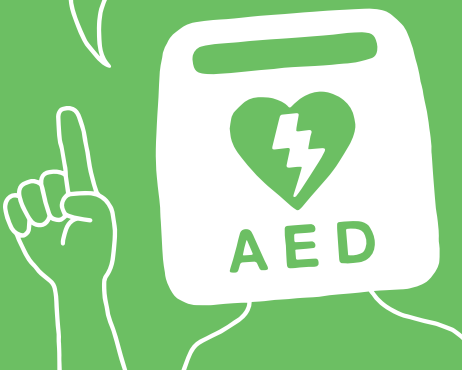
に

あ

る

?

確認よろしく!



AEDによる救命処置は、  
一刻を争います。  
いざという時、すぐに使  
えるよう、AEDの設置  
場所を普段から把握して  
おきましょう。



公益財団法人

日本AED財団